介護福祉士・社会福祉士のダブルライセンスの意義と教育のあり方

森 千佐子　壬生 尚美（日本社会事業大学）

１．研究背景

介護福祉士養成施設は 2020 年 4 月 1 日現在、378 校、389 課程あり、そのうち四年制は 63 課程である[1)]。四年制の養成施設では、ほとんどが介護福祉士国家試験受験資格に加えて社会福祉士国家試験を取得できるカリキュラム編成をしており、宮内（2015）は、介護福祉を学ぶ学生は、社会福祉士受験資格を取得する目的で大学に入学する傾向があることを明らかにしている[2)]。

介護福祉士養成大学連絡協議会準備会の調査報告において、四年制大学における介護福祉士養成は「社会福祉士とのダブル資格取得者として、幅広く多様なニーズに対応できる人材養成」[3)]であるとしている。しかし、四年制大学で介護福祉士を養成する意義や教育内容に関する研究[4～7)]、介護福祉職のリーダーに関する研究や報告[8～10)]はなされているものの、社会福祉士とのダブルライセンスがどのように役立っているかを明確にした研究は少ない。

介護福祉士と社会福祉士のライセンスが相互に役立っている内容を整理し、意義や価値について明らかにすることは、ダブルライセンスの取得を目指す学生の動機づけにつながること、また効果的な教育内容について検討することができるものと考える。

２．研究目的

本研究の目的は、介護福祉士と社会福祉士のダブルライセンスが相互に役立っている内容を整理し、ダブルライセンスの意義や価値および必要な学習内容等について明らかにし、具体的な教育内容について検討するための基礎資料とすることである。

３．研究方法

（1）調査対象者

四年制大学において、介護福祉士・社会福祉士の両養成課程で学び、福祉専門職として従事している人を対象とした。

（2）調査方法

2019 年 10 月から機縁法により調査対象者の紹介を受け、同意が得られた対象者に対し、インタビューガイドに沿ってインタビュー調査を行った。調査期間は、2019 年 11 月～2020 年 2 月である。

（3）インタビュー内容と分析方法

インタビューの内容は、①ダブルライセンス取得の動機、②ダブルライセンスを取得してよかったと思うこと、③大学で履修した科目や内容で、特に役に立っていると思うもの、④修得しておきたかった知識・技術、⑤介護福祉士・社会福祉士養成教育への要望などである。インタビューで得られたデータは逐語録に起こし、質的帰納法を用いてカテゴリー化した。

４．倫理的配慮

本研究については、日本社会事業大学研究倫理委員会の審査を受け、承認を得たうえで調査を実施した（承認番号 19-0601）。調査の実施にあたり、調査対象者に対し、調査の目的や内容・方法を示し、調査への協力は任意であり、拒否および同意撤回をしても不利益を被ることはないこと、個人の特定はされないこと等を説明し、書面にて同意を得た。また、インタビューに関しては、IC レコーダーによる録音の依頼を行い、データの取扱い等についても説明を行った。

５．結果

（1）調査対象者

調査対象者は9名であり、年齢は23～26歳、勤務年数は1年未満が5名、1～2年が2名、4～5年が2名であった。勤務先は介護老人福祉施設が7名、福祉事務所1名、社会福祉協議会1名である。介護福祉職が6名、相談職3名で、1名が介護のフロアリーダーをしている。

（2）介護福祉士と社会福祉士のダブルライセンス取得の動機

大学入学前には、8名は介護福祉士の資格取得、1名は社会福祉士の資格取得を目指しており、全員が「大学で両資格が取得できることを知った」と答えていた。

そして、「取得できるなら取っておきたい」「仕事の幅が広がる」「選択肢が増える」「勉強したことが役立つ」と考えたことが主な理由であった。

（3）ダブルライセンスを取得してよかったと思うこと

介護福祉職の6名からは、「情報の伝え方の工夫」や「制度の理解」ができ、「複数の視点」が得られたという回答があった。また、「仕事の幅や職場の選択肢が広がる」「賞与に反映」などが挙げられた。しかし、介護福祉士として仕事をする中で、「社会福祉士の資格を十分に生かせているとは言えないと思う」と答えた人もいた。

相談職の3名は、「専門用語の理解」「施設の理解」「利用者の生活状況の理解」ができると回答した。また「他職種・ケアマネジャーなどが好意的」「信頼が得ら

れやすい」と、仕事上の相手との関係性によい影響があることも挙げていた。

（4）現在の仕事に特に役に立っていると思う科目

介護福祉士養成カリキュラムにおいては、主に以下の科目「　」と役立っている内容【　】が挙げられた。

・「介護過程」（6名）：【アセスメント力】【ICFの視点】【観察力】【ニーズの把握】

・「コミュニケーション技術」（4名）：【基本的姿勢】【認知症対応】【障害特性に合わせる】【ロールプレイでの技術修得】

・「認知症の理解」（4名）：【症状の理解】【尊重する態度】【背景の理解】

・「医療的ケア」（3名）：【実地研修につながる】【手順の理解】【家族介護での負担の理解】

その他、「レクリエーション」「老人福祉論」が科目として挙げられた。

社会福祉士養成カリキュラムにおける科目「　」と役立っている内容【　】については、以下の回答があった。

・「相談援助技術・演習」（7名）：【事例による多様な利用者やサービスの理解】【ロールプレイによる基本姿勢の修得】【多面的な考え方】

・「障害者福祉論」（2名）：【症状の理解】【利用者の気持ちの理解】

・「相談援助実習」（2名）：【ニーズの把握】【プランの立案】

その他の科目は、「福祉経営論」「介護保険等の制度論」「地域福祉論」「社会調査法」であった。

（5）修得しておきたかった知識・技術

在学中に修得しておきたかった知識や技術は、以下の通りである。

・「医療関連」（4名）：【薬の知識】【疾患の理解】【症状の理解】

・「福祉用具」（3名）：【新しい福祉用具の知識】【補装具の装着方法】

・「多職種連携・協働」（3名）：【他職種との関係性】【実践的な連携・協働】【学習したことと現実との乖離】

・「福祉レクリエーション」（2名）：【レクリエーション財】【レクリエーションの企画・運営】

その他、「終末期ケア・グリーフケア」「栄養学（治療食等）」「多様な実習」「マナー研修」などが挙げられた。

（6）介護福祉士・社会福祉士養成教育への要望など

・キャリアプランの課題：「介護福祉士は下にみられている」と感じる。そして、「ゴールがはっきりしていない」ため、介護福祉士をベースとした「上位の専門資格」があればよい。また、「リーダーの質」が重要であり、「しっかりしたキャリ

アプラン」が必要である。
・介護のイメージアップ：「大変なイメージ」「悪いイメージ」があり、「楽しさの周知」が必要である。
・専門職としての姿勢：「利用者の尊重」や「相手の気持ちを考える」「多様な価値観を認める」姿勢が不可欠である。また、「介護の基本」がしっかりしていて、「根拠」を持った介護や説明ができることが重要である。
・人と関わる際の基本的マナー：「基本的なマナー」が身についていない職員が少なくない。「時間を守る」「人の話を聴く」「自己生活のコントロール」など、学生時代からの積み重ねが大切であると感じる。
・現任教育の課題：資格取得がゴールではなく、「向上心」を持ち、「知識の積み重ね」が重要である。今は無資格者や未経験者の入職が多く、福祉や介護を学んだ人とそうでない人とでは「価値観が違う」と感じる。「介護の知識」や「考え方」「コミュニケーション能力」など、施設での教育のあり方が課題であると考えている。
・福祉用具の知識：介護場面では腰を痛める職員が多く、「福祉用具」の導入・活用に力を入れている。そのため、学生の時に「多様な福祉用具を体験」しているとよいと思う。

その他、今後、外国人の利用者が増えることが考えられるため、対応できる人材が必要なこと、人材不足への対応、実習生の雰囲気が変わってきていることなどが語られた。

６．考察

インタビューからは、介護福祉士と社会福祉士の両課程での学びや、ダブルライセンスを取得したことが、他職種との関係作りや利用者の状態・生活状況の理解に役立っており、活躍の場の広がりにつながっていると思われる。

学習した介護福祉士養成科目では、介護過程の実践的な展開により理論的な枠組みをもって情報収集し、必要な情報を分析するアセスメント力、ニーズの把握力が養われ、実践の場で発揮されていることがわかる。また、コミュニケーションの基礎や相手の状態に合わせたコミュニケーション力、認知症高齢者の理解や対応する力が修得できたと考えられる。「医療的ケア」については、実際に職場で行っている人はいなかったが、大学で基礎研修を修了したことで、手順のみでなくそれを担っている家族の負担感などの理解につながっていた。

社会福祉士養成科目では、多くの事例に触れ、ディスカッションやロールプレイを行ったことが、実際に担当する利用者を多角的に理解し、サービスを考えることに役立っている。また、相談援助実習において、援助プランを立案したことが実践につながっている。佐々木（2010）は、専門職としての基本的な姿勢や考え方につ

いて、「授業の中で伝えきれるものではなく、教員や友人との交流やディスカッションを通じて違う立場の人の地点を知り、自己を見直しながら身につけていくものである」[6] と述べている。授業の方法として、今後もディスカッションやロールプレイを効果的に取り入れることが必要であると考える。

一方で、修得しておきたかった知識や技術としては、医療関連および福祉用具の知識、多職種連携・協働などが挙げられた。2018年度の介護福祉士養成カリキュラム改正[11]において、「チームマネジメント」や「介護と医療の連携」が見直しの観点として挙げられており、実践の場でこれらが必要とされていることが示唆された。福祉・介護の対象者には何らかの疾病があり、食事療法や薬物療法等を行っていることが多い。介護福祉士は痰の吸引や経管栄養等の医療的ケアを担うこととなり、役割が広がっている。介護福祉士や社会福祉士は、医療職との連携・協働の中で、利用者の状態を把握し、専門的視点から情報提供や意見交換をすることが求められている。そして、必要に応じて医療職にスムーズにバトンタッチできることが重要である。そのためには、どのような知識の修得が必要であるかを検討し、教育内容を精選することが必要である。

生活支援技術に追加された「福祉用具の意義と活用」も、実践の場で必要とされていることが確認できた。学内の授業において体験できる福祉用具は限られてしまうため、実習や研修会等、学外において多様な福祉用具の知識・技術を修得できる機会を作ることが必要であろう。

多職種連携・協働については、介護福祉士カリキュラムの改正において、介護実習の教育内容の留意点のひとつに「多職種協働の実践」が明記されている。2019年度社会福祉士養成カリキュラム改正[12]においても、多職種・多機関との連携の重要性が指摘され、多機関の協働による包括的な相談支援体制の仕組み等の知識を習得するための科目として、「地域福祉と包括的支援体制」が創設された。

多職種連携・協働については、他職種との関係性や学習したことと現実との乖離が挙げられた。キャリアプランの課題においても、介護福祉士と他職種との上下関係が語られていた。介護福祉士の専門性の確立、各職種同士がそれぞれの専門性を理解したうえでの連携・協働が重要であり、介護実習やソーシャルワーク実習において体験する、連携・協働の実際・あり方は大きな課題であると考える。

その他、介護福祉士・社会福祉士養成教育の要望の中で挙げられた専門職としての姿勢や基本的マナーについても、重要な指摘と受け止めることが必要であろう。また、無資格者や未経験者への教育のあり方が課題として挙げられており、介護福祉職のリーダーとして、職員教育の役割も大きいと考えられる。さらに、新たなものを積極的に取り入れる姿勢、外国人の利用者や職員に対応するための知識・技術に関する検討も、必要であると思われる。

７．まとめ

介護福祉士と社会福祉士のダブルライセンスを取得して福祉専門職として従事している人のインタビューを通し、以下のことが整理できた。

介護福祉士・社会福祉士のライセンスは、他職種との関係作りや対象理解に役立っており、活躍の場の広がりにつながっていると思われた。大学での授業により、対象についてアセスメントし、プランを立案する力や対人支援の基礎が身につき、実践に活かされていることがわかった。また、ロールプレイやディスカッションなどの授業形態が学びに有効であることも確認できた。

修得しておきたかった内容や養成への要望からは、他職種との連携・協働に必要な知識や、実際の連携・協働のあり方に課題があることがわかった。その他、卒業後のキャリアプランや現任教育など、現状の課題も浮かび上がった。

今回は調査対象者が少なく、対象者の半数は勤務年数が１年未満であった。今後は、インタビューデータをもとに質問紙を作成し、対象を広げて調査することで、ダブルライセンスの意義と教育内容についてさらに検討を進める予定である。

８．研究成果の活用・提供予定

①人間福祉学会　第21回人間福祉学会大会にてポスター発表（開催未定）「介護福祉士・社会福祉士のダブルライセンス教育における課題」（仮題）

②人間福祉学会誌第20巻に投稿「介護福祉士・社会福祉士のダブルライセンス教育に関する研究」（仮題）

③インタビューデータをもとに質問紙を作成して調査を行い、ダブルライセンスの意義と教育内容についてさらに検討する。

引用・参考文献

1）WAMNET：専門職養成施設検索＞介護福祉士養成施設
https://www.wam.go.jp/school/OpenServlet?ACTIONTYPE=OS11LST（2020.5.30 アクセス）

2）宮内寿彦（2015）「介護福祉を学ぶ修学動機支援に関する研究（3）～4 年制大学で介護福祉学を学ぶ動機～」十文字学園女子大学研究紀要,46,99-108.

3）介護福祉士養成大学連絡協議会・準備会（2007）「大学における介護福祉士養成に関する基礎調査報告」1-12.

4）吉田弘美・佐藤直由（2003）「４年制課程における介護福祉士教育に関する一考察：学生の意識調査より」保健福祉学研究，1，97-109.

5）井上千津子（2008）「4 年制大学における介護福祉教育の社会的意義」京都女子大学生活福祉学科紀要,4，1-6.

6）佐々木宰（2010）「四年制大学における介護福祉士基礎教育が卒後の実践にもたらす効果と課題」大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究，12，45-59.

7）浦秀美（2014）「四年制大学における介護福祉士養成のあり方：A 大学の介護実習の現状から今後の介護福祉士養成を探る」長崎国際大学論叢，14，103-114.
8）松井奈美・佐々木由惠・熊谷徹子・他（2011）「ニーズの多様化に対応できる指導的介護福祉の養成の在り方に関する基礎的研究－介護リーダー養成プログラムの開発を目指した養成研修の試みと効果－」日本社会事業大学社会事業研究所
9）太田貞司（2015）「地域包括ケアシステムと介護職チームのリーダー：認定介護福祉士（仮称）の創設」日本在宅ケア学会誌 19(1)，16-21.
10）野田由佳里・太田貞司・及川ゆりこ・鈴木 俊文（2017）「ファーストステップ研修修了者追跡調査による研修効果及び介護職リーダー・中堅介護福祉士の役割に関する研究」聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要，15，81-95.
11)厚生労働省「平成 30 年度介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/shakai-kaigo-yousei/index_00001.html/2020/07/28)
12)厚生労働省「令和元年度社会福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/shakai-kaigo-yousei/index_00012.html/2020/07/28)